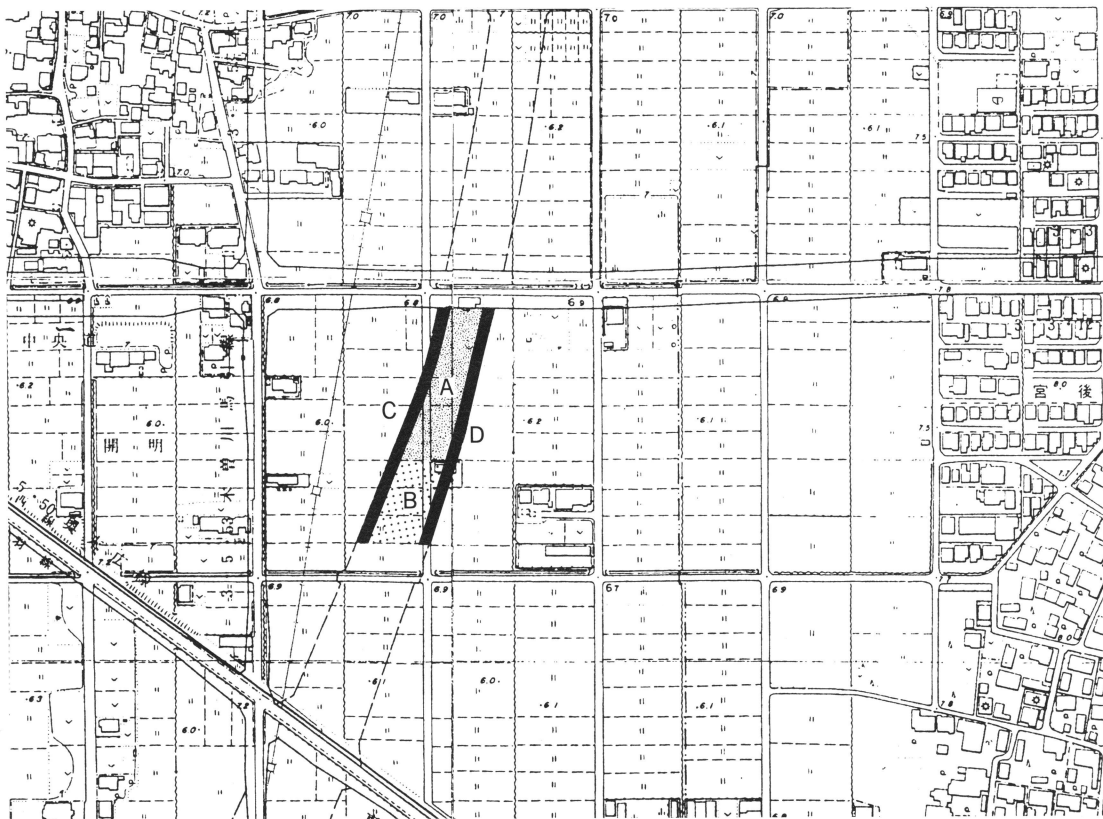


東 新 規 道 遺 跡

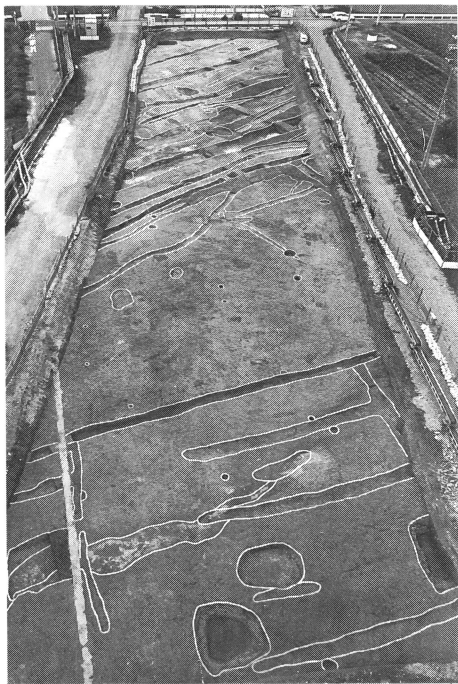
調査の経緯 東新規道遺跡は、尾西市開明に所在する。発掘調査は、東海北陸自動車道の建設に伴うものであり、日本道路公団及び愛知県土木部より愛知県教育委員会を通した委託事業として当センターが実施した。調査面積7,294㎡をA B C Dの4区に分割して、平成7年8月から平成8年3月にかけて調査を行った。調査区の現況は標高7mの水田及び畑地である。調査区の北には一宮市今伊勢町から尾西市開明にかけて広がる県遺跡番号07001の西上免遺跡があり、弥生時代から中世にかけての埋蔵文化財包蔵地となっている。東には一宮市今伊勢町に所在する県遺跡番号02051でんやま古墳や県遺跡番号02052野見神社古墳などがある。西には県記念物番号0710で尾西市指定遺跡でもある安土桃山時代の野府城跡がある。

調査の概要 遺跡の基本層序は、上から耕作土層・灰色粘土層・黒褐色粘土層・灰色シルト層・細粒砂層であり、第4層の灰色シルト層で遺構検出を行った。調査区北半部は耕作土層を除去すると直ちに灰色シルト層となり遺構検出が可能となる。

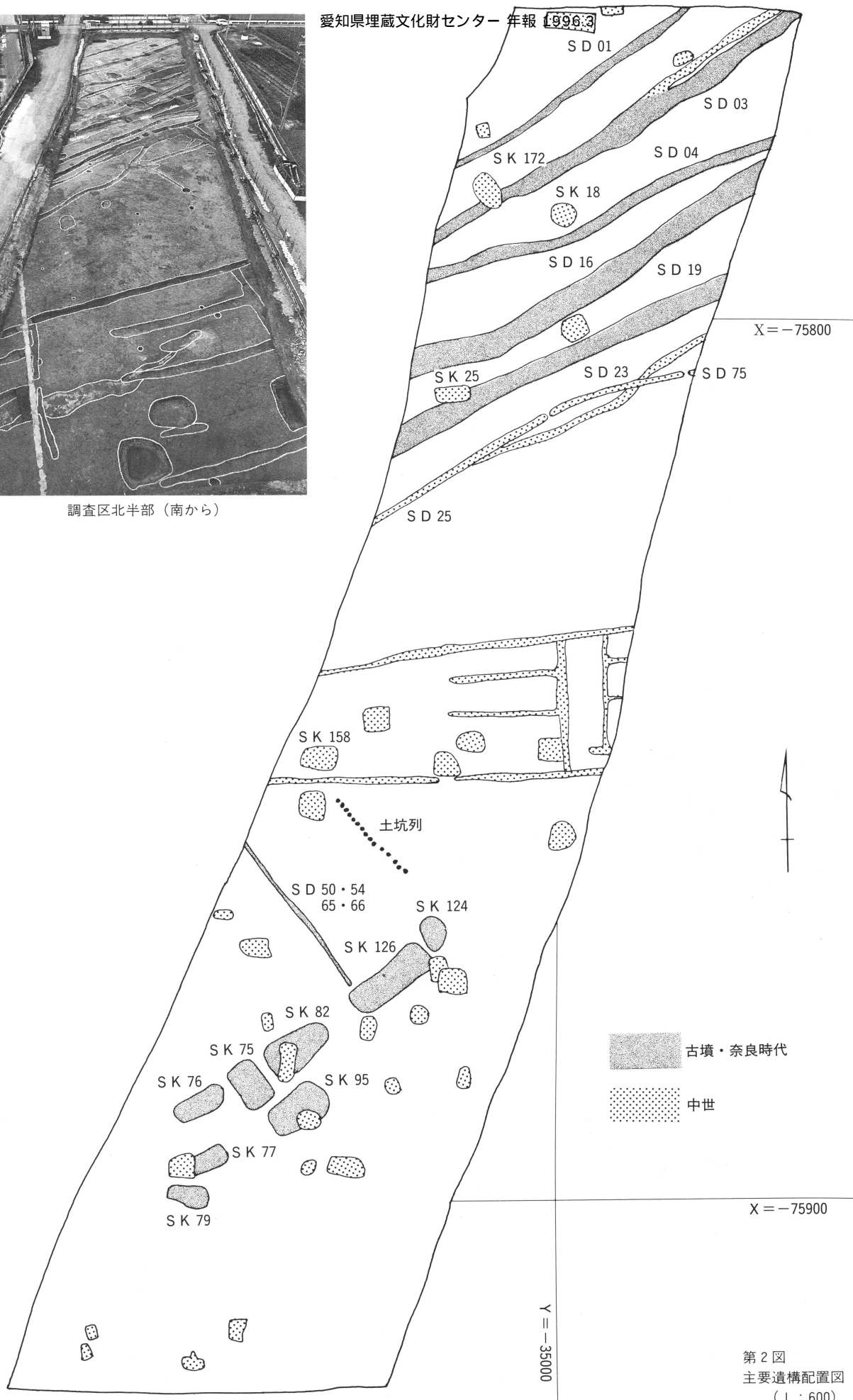
調査成果としては、古墳時代の数条の溝及び耕作地と想定される土坑群を検出したこと、中世の溝及び土坑を検出したことなどがあげられる。 (牧 謙治)



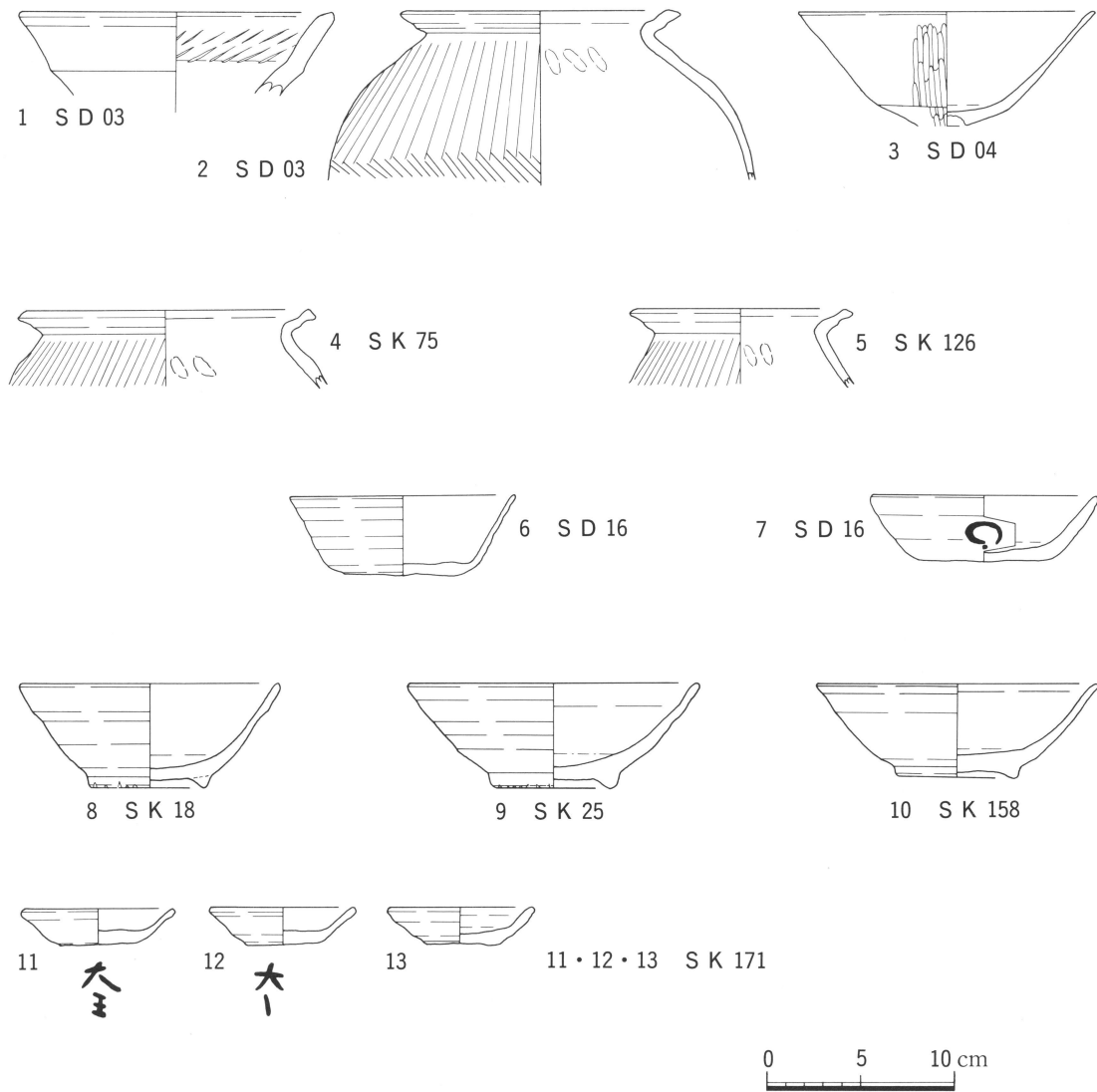
第1図 調査区位置図 (1:5000)



調査区北半部（南から）



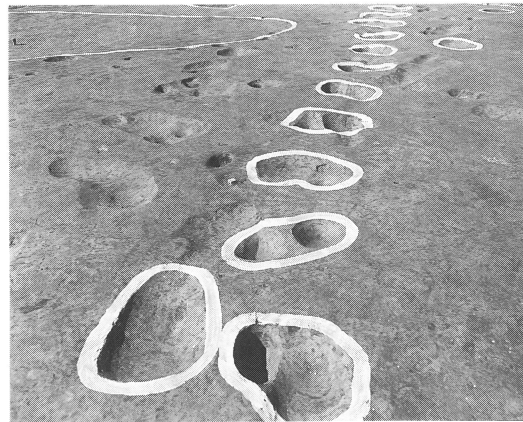
第2図
主要遺構配置図
(1 : 600)



第3図 出土遺物実測図（1：4）



S D 03のS字甕出土状況（西から）



土坑列（南東から）

古墳時代の遺構 古墳時代の主要な遺構としては、まず調査区北部に位置する溝 S D01・03・04・19が上げられる。S D03は、幅205cm、深さ58cmである。埋土は5層からなり、その最上層からS字状口縁台付甕D類（松河戸I式・II式）や柳ヶ坪型壺（松河戸I式）などが出土している。これらの溝は4世紀末を中心とした時代のものと考えられる。また、北東から南西に向けての方向性を持つことが特徴である。次に、調査区南部に位置するS K75・76・77・79・82・95・124・126とS D50・54・65・66とが上げられる。前者の土坑群は、長方形に近い平面形で、深さ数センチの浅い窪みである。S K76・126からS字甕D類（松河戸I式）が出土している。これらの土坑群は、北東から南西に向けての方向性を持ち、北部の溝群とほぼ平行する位置関係にある。S D50・54・65・66は幅40cm、深さ15cmほどで、元は一続きの溝であった可能性もある。南東から北西にかけての方向性を持ち、南部の土坑群と北部の溝群とに直交しそれらをつなぐような位置関係にある。これらの土坑群は小区画水田を連想させるが、水田や畠など何らかの耕作地である可能性を提起しておきたい。S K76からは管玉1点が出土した。また、南部の土坑群の北で、S K139から159までの土坑列を検出した。それぞれの土坑が、長径およそ50cmの楕円形で、その中に深さおよそ10cmの小土坑が2基並んでいる。16基の土坑がおよそ66cmの等間隔で、南東から北西の方向で直線上に並んでいるが、性格は不明である。

奈良時代の遺構 奈良時代の遺構としては、S D16がある。幅320cm、深さ56cmで、調査区東端部では溝底が激しい水流のためにかなりえぐられたようすが見られた。美濃須恵窯産の8世紀初めと見られる須恵器杯が2点出土した。

中世の遺構 中世の遺構としては、調査区中央部の溝群とそのやや北の溝群と、そして調査区全体に存在する土坑が上げられる。13世紀初めを中心とする遺構としては、調査区中央やや北の溝群S D23・25・75が上げられる。幅40cm、深さ51cmで、箱形の掘り方であり、一続きではなく50cmほど間をあけている。これらの溝の南側と北側とを区画していると考えられる。また、区画された北側にある土坑のうちいくつか（S K18・25・172など）からは、瀬戸窯産と見られる12世紀後半から13世紀初めの完形の灰釉系陶器が出土している。14世紀頃の遺構としては、調査区中央部の溝群が上げられる。この溝群は、東西あるいは南北の方向を持ち、いくつかの長方形の区画を形作っている。この溝群以南の土坑は、ほぼ東西南北の方向を意識して形成されたと見られ、また遺物はほとんど出土しなかった。

弥生時代の遺物 弥生時代中期の遺物として包含層資料がほとんどではあるが、石鏃が5点と、調査区中央部やや南のあたりから粗製剥片石器が7点出土している。

まとめ 東新規道遺跡では、4世紀末を中心とする古墳時代の遺構と13・14世紀の中世の遺構とが見つかったが、いずれも集落の周辺部に位置する遺構と考えられる。古墳時代の遺構については、いずれも5世紀前半とされる、東600mにあるでんやま古墳や南東500mにある野見神社古墳との関連を検討する必要がある。中世の遺構については、遺構の在り方と遺物の出土のようすからして、現在の野府の集落がのる北西の微高地にやはり当時の集落の中心部が存在したと考えられる。

（今西康二）